



Title	文脈から見た日本語の対称表現の特徴
Author(s)	都, 賢娥
Citation	研究論集, 20, 111 (左) -121 (左)
Issue Date	2021-03-31
DOI	10.14943/rjgshhs.20.1111
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/80785">http://hdl.handle.net/2115/80785</a>
Type	bulletin (article)
File Information	07_rjgshhs_20_p0111-122_1.pdf



[Instructions for use](#)

# 文脈から見た日本語の対称表現の特徴

都 賢 娥

## 要 旨

本研究では、発話の中の聞き手を指す表現を「対称表現」と呼ぶことを提案しており、その中の固有名詞・普通名詞・対称詞（例：あなた・おまえ）の違いを「文脈」という観点から考察し、各表現が聞き手（個人）を指示するまでの、解釈のプロセスを明らかにすることを目的としている。各表現が聞き手を指すと解釈されるためには、話し手と聞き手はその解釈に関わる何らかの知識や情報を持っている必要がある。本研究では、この知識について、加藤（2017）による発話の解釈における3つの種類の「文脈：形式・状況・知識文脈」と、その中の知識文脈に関わる「世界知識」を参考に考察を行った。そこから、固有名詞・普通名詞・対称詞が聞き手を指すと解釈される際、発話のやりとりの間、義務的に保持される必要がある形式文脈は、すべての表現において活性化されており、各表現の特徴によって、その場の物理的な状況に関する知識としての状況文脈と、世界知識としての知識文脈の活性化の違いが見られることが明らかになった。一方、普通名詞の中には「先生」のように敬称としての振る舞いを見せるものがある。それに対して、「店員さん」は普通名詞だけでは対称表現的には使えないが、付属成分の「さん」を付けることで聞き手を指すことになり、敬意を示すことになる。そこから、本研究では、付属語の敬称は、敬意を示すだけでなく、「直示性を付与または強化する」機能があると主張した。

本研究での対称表現は人称ダイクシスと関係があると言えるが、人称ダイクシスの研究では対人語用論（対人配慮）の観点からの考察が行われることが多く、その際、文脈という要素が深く関わってくる。本研究では、日本語における様々な対称表現の違いを検討する1つの方法として、語形や用法だけではなく、文脈からの接近を試みたと言える。

## 1. はじめに

本研究では、日本語の発話の中での聞き手を指す表現を「対称表現」と呼ぶことを提案し、その中の固有名詞（例：山田・太郎など）、普通名詞（例：先生・お姉さんなど）、対称詞（例：あなた・おまえなど）を中心に、それらの表現が聞き手を指すと解釈されるまでのプロセスについて、文脈の観点から考察する。また、上記の種類対称表現には「さん・さま」のような敬称を付けることができる。しかし、敬称が付属成分として付加された場合と、対称表現が単独で使われた場合の違いに関しては、まだ十分に解明されていないようにも思われる。一方、普通名詞の中には、肩書としてのもの（例：先生・社長など）もあり、これらは敬称のように機能するとも言えるが、この普通名詞と敬称との違いについても検討の余地があるように思われる。そこで、本研究では、対称表現の聞き手指示プロセスを文脈という観点から考察し、対称表現における敬称の位置づけとその機能についても検討する。

## 2. 対称表現という用語について

本格的な考察に入る前に、本研究における「対称表現」という用語について説明する。また、聞き手を指す表現の中には、「あなた・あんた・おまえ・きみ」などのような2人称代名詞とも呼ばれる語類もあるが、その名称についても少し触れることにする。

まず、「あなた」などのような語類に関しては、従来の研究では、2人称代名詞と呼ぶことが多かった。これについて、鈴木（1973）では、日本語のには文法範疇としての人称はなく、その役割を担うことばがあるだけであることを指摘し、話の相手に言及することばの総称を「対称詞」と呼んでいる。そして、日本語の対称詞には2つの用法があり、ある文の主語または目的語として用いられたことばが、内容的には相手を指している「代名詞的用法 (pronominal use)」と、相手の注意を引きたいときや、相手に感情的に訴えたい場合などに用いられる呼びかけ語としての「呼格的用法 (vocative use)」があると説明する。ただし、鈴木（1973）では、「山田課長」や「山田さんあなた」などのような2つ以上の種類の表現が複合した形や、さらに、「山田さん」、「あなたさま」などのような敬称が付いた形など、対称詞の中のバリエーションについては特に言及していない。一方、田窪（1997）では、人称代名詞という範疇は性数格の一致のある言語において、その一致特性のみを担う範疇であるため、名詞と区別された統語範疇としての代名詞は閉じられた語類であるのに対して、日本語の「わたし・あなた」などの人称を表す語類は一致を求めず、必要であれば「ミー・ユー」などのように外来語からの流入も許す点から開かれた語類であり、他の名詞類と区別する文法的理由はないと述べており、人称代名詞の代わりに「人称名詞」という用語を提唱している。そして、それを引き継ぐ以降の研究では、「わたし・あなた・かのじょ」のような表現について、それぞれ「自称・対称・他称人称名詞」

と呼んでいる。しかし、日本語には人称という文法範疇がない点、また、「あなた・かのじょ」という表現が空間指示表現を含む点からも、そもそも人称代名詞とは考えにくく、人称名詞という用語の使用にも妥当性があるのかを考える必要がある。

そこで、本研究では、従来の対称詞が指す範囲を狭め、「あなた・おまえ」のような語類を指す用語として用いることにする。そして、上記の2つ以上の種類の表現が複合した「山田課長」や、敬称が付加された「山田さん」のような表現を包括して、日本語の発話の中の聞き手を指す表現を「対称表現」と呼ぶことにする。この対称表現には、上記の代名詞的用法（命題の中で助詞を伴う形の必須項）と呼格的用法（命題の外にあり、文構造の要素になっていない呼びかけ語）があるが、便宜上、後者の方は「呼びかけ表現」と呼ぶことにする。

### 3. 発話解釈における文脈と対称表現の聞き手指示プロセス

日本語の対称表現は、(1)にあるものが極一部だと言っても良いほど、その数や種類が豊富な方であり、そこから表現による特徴の違いが考えられる。

- (1) a. 山田・太郎・山田太郎・山田さん・太郎さん・山田太郎さん
- b. 部長・お父さん・おじさん・お客様
- c. あなた・あんた・おまえ・きみ

また、(1)にある表現がすべて同じ人物（聞き手）を指しているとする場合、話し手と聞き手は、そのような解釈を得るために何らかの知識または情報を持っている（共有する）必要がある。話し手の場合、(1a, b)の固有名詞と普通名詞で聞き手のことを表すためには、聞き手の名前や属性などのような知識が必要になる。聞き手の場合には、自分に関する知識はあるはずだが、(1b)「部長・お父さん」のように、自分に関する情報がある程度反映するが、個人をすぐには特定できない普通名詞や、「おじさん<sup>1</sup>・お客様」のような普通名詞と、(1c)の対称詞のように、見ず知らずの相手にも使える表現の場合には、その場の状況を話し手と共有している必要がある。

このように、同じ対称表現であっても、固有名詞、普通名詞、対称詞のように種類（カテゴリー）が異なる場合、各表現が聞き手を指すと解釈されるまでのプロセスに違いがあることが

---

<sup>1</sup> 親戚の叔父ではなく、見ず知らずの子供などが中年男性を表す場合での使用である。これは、鈴木（1973）による、親族名称の虚構的用法に当たるとも言える。さらに、この用法は「おとうさん・おかあさん・おじいさん・おばあさん・おじさん・おばさん・おにいさん・おねえさん」などへの拡張が見られる。

考えられる。そして、その違いを考えるためには、解釈に必要となる知識・情報や文脈という観点からの考察が必要となる。本研究の対称表現と関連するとも言える人称ダイクシスの研究では、表現の語形や用法だけではなく、使用における対人語用論的（対人配慮）な部分も深く関わってくる。この対人語用論的な部分を解明するためには、言葉遣いにおける規範（性別・年齢・地域など）をはじめ、表現の選択における話し手の判断や意図の考察が必要となるが、その際、文脈の説明を欠けることはできない。そのため、対称表現の種類による特徴の違いを検討する1つの方法として、語形や用法だけではなく、文脈との関わりについても考察を行う必要があると思われる。

そこで、本研究では、対称表現の中でも比較的使用頻度が高い方である、固有名詞、普通名詞、対称詞を中心に、それらの特徴の違いを考える際、文脈という観点からの考察を試みる。

そのため、以下では、発話の推論や解釈に関わる記憶と知識、そして文脈について論じている加藤（2017）を参考し、対称表現の中の固有名詞、普通名詞、対称詞における、聞き手を指示するまでのプロセスの違いについて考察する。

### 3.1. 加藤（2017）の発話解釈における3つの文脈

加藤（2017）では、発話の解釈に関わる要素として、「記憶・知識・文脈」を中心に詳しく論じており、発話の解釈または推論に関わる文脈について、以下の3つを設定している。

発話の解釈・推論に関わる3つの文脈

#### a. 形式文脈（formal context）

：同一セッション（session）<sup>2</sup>の内部で言語的に具体化される発話の連続的な蓄積からなる。原則として、セッション参加者が共有していなければならないものであり、命題の形で談話記憶に蓄積できる陳述性の情報である。その意味では形式性・客観性が高い。ただし、談話記憶内に膨大な量を収蔵しておくとも自然的抽出が生じうる。

#### b. 状況文脈（situational context）

：セッションの進行と時間的に平行して存在する物理的な状況についてのセッション参加者の認知と解釈に基づく情報の集合である。原則として、セッション参加者が共有可能であり、

<sup>2</sup> 加藤（2017）では、セッションについて「やりとりの開始から終了までの言語行動の全体」と述べている。さらに、セッションが開始してから、話題が転換するなど、一連の発話を内容と一貫性と統合性などの観点からより小さい単位に区分することも可能であり、セッション内部におけるより小さい単位をパラグラフ（paragraph）と呼んでおり、セッションは一つ以上のパラグラフから成るとしている。

命題の形にすることができるが、その度合いは一定ではない。談話記憶内に収蔵される。認識が容易なものは共有度が高く、共有も義務的であるが、容易に認識できないものは共有の義務も低い。物理的状況が共有されていなければ、得られる状況文脈も共通されない。

c. 知識文脈 (knowledge context)

：セッションが開始する以前から、セッション参加者が持っている知識のうち、言語知識を除外した世界知識 (world knowledge) にあたるものである。世界知識全体が個人間で完全に一致することはないが、共有度の高いものも少なくない。原則として命題の形で集約されている膨大な知識であるが、あまりにも膨大であるために、すぐに推論や解釈に使えるとは限らない。推論・解釈に使える状況に活性化されていないものが知識記憶領域から談話記憶領域に送られると考える。知識記憶にあっても活性化されていない情報はすぐには解釈に使えない。

加藤 (2017) では、形式文脈と知識文脈、また、状況文脈と知識文脈など複数の文脈を利用して、あるいは、知識文脈の内部で推論を行うことで新たに得られる想定を二次的な文脈 (高次文脈) と見て、上記の3つ (一次文脈) に加えることもできると説明する。

世界知識とは、世界に関する知識のことだと理解することができて、加藤 (2017) では、「セッションが始まる前から存在している記憶で、いわば世界に関する知識の総体である」と規定しており、以下のように、世界知識の中でも共有範囲のレベルが存在すると説明する。

世界知識の共有範囲<sup>3</sup>

- a. 人間として共有する普遍的知識  
：「生き物はいつか死ぬ」
- b. 文化的知識などいくつかのレベルの共同体で共有される知識  
：「日本ではめでたいことがあるとき、赤飯を食べる」
- c. 家族など小規模の共同体でしか共有されない知識  
：「我が家の外食メニューは、いつも焼肉だと決まっている」
- d. 本人しか知らないような知識  
：「昨日、誰にも知らせずこっそり買い物をした」

以上のような内容を参考に、(1) のような対称表現が、それぞれ聞き手を指示すると解釈される際、文脈の活性化の段階がどのように関わるのかについて考察する。

---

<sup>3</sup> 各例は、「生き物はいつか死ぬ」を除いては、筆者によるものである。

### 3.2. 対称表現と文脈との関係

ここでは、先ほどの(1)にあった固有名詞、普通名詞、対称詞が同じ聞き手を表している想定し、各表現が聞き手を表すと解釈されるまで、上記の3つの文脈がどのように関わってくるのかについて考察する。

- (1) a. 山田・太郎・山田太郎・山田さん・太郎さん・山田太郎さん：固有名詞  
 b. 部長・お父さん・おじさん・お客様：普通名詞  
 c. あなた・あんた・おまえ・きみ：対称詞 (再掲)

(1) から、聞き手である人物の名前は「山田太郎」であり、家族関係の中では「お父さん」、職場では「部長」の位置にあることが分かる。また、(見ず知らずの子供などから)「おじさん」と呼ばれることから、中年男性であることが想定できる。以下では、(1)にある対称表現が当該人物であると解釈されるまでのプロセスを、文脈の活性化の段階と関連付けて考察する。

まず、(1a)の固有名詞は、定(definite)または定記述(definite description)としての性質を持つと言われており、これは、個人または個々の物事を「特定」できるかどうかのことであると言える。加藤(2006)では、固有名詞について、語形と指示対象の間に一対一の対応関係が成立し、ソシユールによるシニフィエ<sup>4</sup>としての意味を持たないと見ることができると説明する。文脈との関係から見ると、まず、発話のやり取り(セッション)の間、形式文脈は義務的に保持される必要があるため、どの表現においても、聞き手を指すと解釈される際に、この形式文脈は常に活性化されていると考えられる。一方、固有名詞の使用によって、「山田太郎」という人物の特定にたどり着くまでには、聞き手が「山田太郎」という人物であることを話し手が世界知識として有していれば良いことになる。この世界知識の共有度に関しては、個人の周りの家族など、小規模の共同体で共有される知識範囲として考えられる<sup>5</sup>。そして、これを知識文脈が活性化されているとすると、固有名詞を対称表現的に使用する場合、聞き手の特定まで必要とされる文脈の活性化の段階が、2段階において終了すると言える。ただし、同名の他者がいる場合には、話し手が指す人物が、(1)の人物であることを話し手と聞き手が共有している必要がある。そのためには、その場の物理的な状況についての話し手と聞き手の知識の共有が必要となることから、同名の他者がいる場合での固有名詞による聞き手指示には、さらに

<sup>4</sup> ソシユールは、記号としての言語をシニフィアンとシニフィエに分けており、前者は「表すもの」として音声、後者は「表されるもの」として意味に当たる。そしてこれらが一つの記号としての言語になると言える。

<sup>5</sup> 勿論、アーティストや政治家などの有名人を指す場合には、その共有範囲が広がることが考えられる。

状況文脈を参照することになり、3つの文脈がすべて活性化されると言える。

ちなみに、もう1つの可能性として、話し手が聞き手の職場の中の人物である場合、聞き手を「山田部長」と呼ぶ場合も考えられる。これは、固有名詞と普通名詞が複合された形であるが、「山田」という部分から個人の特定ができる点から、固有名詞として扱うことができる。ただし、「山田・山田さん」と呼ぶ場合と比べると、話し手は聞き手が「山田太郎」という存在であることに加え、職場の中で「部長」という地位にあるという知識も持っていることになる。この場合での世界知識の共有度も、小規模の共同体で共有されるものとして考えられる。

次に、(1b)の普通名詞は、大きく家族関係を表す「お父さん・お姉さん」などのような親族名詞と、社会的地位・肩書を表す「部長・先生・おまわりさん」などの役職名詞に分けることができ、親族・役職名詞という用語からわかるように、普通名詞の最も大きい特徴は、ある「役割」を表す点にあると言える。滝浦(2008)では、普通名詞による呼称が、その人を直接呼んでいるのではなく、その人の「役割」を間接的に表すと述べている。一方、加藤(2006)では、例えば「猫」という表現は、そこに含まれる指示物が個別に異なっており、異なる個体をとりまとめて範疇を設定し、意味化する作用が見られる点から、固有名詞と普通名詞の違いは「範疇化の有無」と言えると説明する。

また、(1b)は、「部長・お父さん」のように、個人の属性を知識として持っている必要があるものと、「おじさん・お客様」のように、特に必要のないものに分けられる。「部長・お父さん」を文脈との関係から見てみると、話し手は聞き手が家族または職場において、「お父さん」または「部長」という役割・地位を持っていることを世界知識として有している必要がある。さらに、話し手と聞き手との会話の場に、家庭での「お父さん」の役割や、「部長」という職責を持つ者が複数いても、話し手が指す人物が「山田太郎」という人物であることを話し手と聞き手が知識として共有している必要があり、これは、範疇の中から個々の特定をすることと言える。そして、そのためには、形式文脈をはじめ、知識文脈と状況文脈がすべて活性化され、3段階に渡っていることが考えられる。これは、先ほどの「山田部長」が固有名詞として個人を特定できるため、同名の他者がいない限り状況文脈を参照する必要がない場合との相違点であると言える。一方、「おじさん・お客様」の場合には、個人に関する世界知識は特に必要なく、その場の状況から、状況文脈を参照して聞き手を特定することができる。つまり、同じ普通名詞だとしても、特定の個人に関する知識(知識文脈)の必要有無によって、聞き手を指すまでの段階に違いが見られると言える。

最後に、(1c)の対称詞は、相手(聞き手)を指し示す、直示(deixis)または現場指示としての性質を持つと言われる。田窪(1997)では、話し手・聞き手という対話の役割だけが指定されている直示的な語(その場にあるのを指すこと)であると述べており、これは固有名詞・普通名詞が記述によってたまたまその発話場面で「山田・部長」に当たる特定の人物を指示対象として決めているのに対して、「わたし・あなた」などは直示行為によって「話し手自身・聞き



手」を指示対象として決めているという違いがあると言える。つまり、(1c)の対称詞の使用によって聞き手を指示するためには、先ほどの普通名詞の「おじさん・お客様」の場合のように状況文脈が活性化されるが、対称詞は普通名詞のような範疇を設定することはないと言える。ただし、対称詞の使用には、性別や年齢などといった、いわゆる言葉遣いにおける規範が関わってくる。この規範に関しては、知識文脈で除外されている言語知識（語彙や統語規則に関わる知識）として考えられるようにも見えるが、語彙の意味や統語体系の習得だけではなく、ことばの運用と関わり、共同体によって運用に必要な知識が異なる点から、世界知識としても考えられるのではないと思われる。しかし、固有名詞や普通名詞の場合とは異なり、この世界知識がなくても対称詞自体が直示用法を持つため、聞き手の特定には基本的に形式文脈と状況文脈だけが参照されると言える。

### 3.3. 対称表現の聞き手指示プロセスに関わる文脈

以上、対称表現の中の固有名詞、普通名詞、対称詞を中心に、各表現が特定の聞き手を指しているとして解釈されるまでのプロセスを文脈の活性化の段階と関係づけて考察した。その違いを以下の表1にまとめる。

表1 対称表現の聞き手指示に関わる文脈

聞き手指示に必要な文脈	固有名詞 (固有名詞+普通名詞)	普通名詞	対称詞
形式文脈	○	○	○
状況文脈	○(同名他者の場合)	○	○
	×		
知識文脈	○	○(聞き手の具体的な役割を示す場合 :お父さん・部長など)	×
		×(聞き手の具体的な役割を示さない場合 :お客様など)	

(○と×は、それぞれ文脈の活性化と非活性化を意味する)

表1から、対称表現の聞き手指示に必要な文脈の活性化の段階が、カテゴリー別に異なることが分かる。固有名詞の場合には、同名の他者がいる場合には、3つの文脈がすべて活性化されるが、一般的には形式文脈と知識文脈の活性化という、2つの段階で聞き手指示のプロセスが終了すると言える。普通名詞の中には、聞き手の特定まで知識文脈が必要ない場合もあるが、普通名詞の代表例とも言える親族名詞や役職名詞の場合には、それらが聞き手の具体的な役割を示すと言えるため、聞き手に関する知識が必要となり、それに加えて、範疇の中の個人を特定するための状況文脈と形式文脈の活性化という、3段階の聞き手指示プロセスが考えられる。

それに対して、対称詞は直示用法を持つため、個人の特定に知識文脈が特に必要ない点が固有名詞と普通名詞と異なり、その代わりにその場の聞き手であるという状況文脈と形式文脈が活性化される、2段階のプロセスが見られると言える。

#### 4. 対称表現と敬称との関係について

ここでは、(1)にある対称表現に、敬称が付いた場合の違いについて簡単に整理し、対称表現における敬称の位置づけとその機能について検討する。敬称としては、一般的に付属語としての「ちゃん・くん・さん・さま」のようなものが考えられるが、肩書としての普通名詞の「先生」のように、自立語の表現が敬称の意味を持っている場合もあることを言及しておく。(1)の中で、敬称を付加できるものをまとめると、(2)のようになる。

- (2) a. 山田さん・山田先生・太郎さん・太郎先生・山田太郎さん・山田太郎先生
- b. お父さん・おじさん・お客様
- c. あなたさま・(あんたさん・おまえさん)

まず、(2a)の固有名詞から見ると、固有名詞には敬称と肩書としての普通名詞の両方を付けることができる。敬称と普通名詞の品詞の違いとしては、敬称が自立性がない付属語としての振る舞いを見せるのに対して、普通名詞は、単独にも付属的にも使えるという点が考えられる。また、使用対象と待遇度という側面から見ると、敬称の場合、表現の中から待遇の違いが見られて、「ちゃん・くん」においては聞き手への親しみを表すのに対して、「さん・さま」は聞き手への敬意を表す。つまり、表現の選択によって、待遇度が調整できると言える。一方、「先生・社長」などの普通名詞は、目上の人物に対する使用が一般的であり、これは、話し手が聞き手の社会的役割を認識しており、両者における社会的関係を示しているとも考えられる。このような普通名詞を敬称として付ける場合には、先述のように、聞き手に関する情報(世界知識)が必要となる。なお、敬称を固有名詞に付ける場合には、聞き手に関する情報が必要となるが、これは敬称自体によるものというよりは、固有名詞の聞き手指示に関わる事項だと考えられる。

普通名詞に関してもう少し見てみると、(2b)の「お客様」は、敬称が付いた形ではあるものの、単独では対称表現的な使用ができず、その有標性(敬意の欠落)からインポライトネス(相手への意図的な攻撃)として解釈される可能性もある。それに対して、上記の「先生」のような普通名詞は、すでに敬称としての意味を含んでいるため、「さん・さま」を付けることができない。また、「お客様」の場合には、聞き手の特定のための個人に関する知識は特に必要ない。このことから、普通名詞による聞き手指示の際、知識文脈が必要となる表現には、敬称として

機能できるもの（肩書）が含まれていることが分かる。

一方、野元（2019）では、McCready（2019）による代名詞代用語（pronoun substitute, 話し手・聞き手を指示する人称代名詞以外の語：野元 2019）の分析を参考に、代名詞代用語になりやすい階層（①固有名詞、②固有名詞＋敬称＞③普通名詞、④普通名詞＋敬称＞⑤敬称）があることを指摘し、日本語の普通名詞には、「先生」のように敬称の意味を内在しているもの（③）があり、「店員」のように普通名詞だけでは代名詞代用語になれない語（④）でも、敬称の「さん」を付ければ代名詞代用語になれると説明する<sup>6</sup>。このことから、本研究では、敬称には「敬意を表す」という意味用法に加え、付属語として話し手や聞き手という役割を与える「直示性の付与（または強化）」の機能があると考え。そこで、敬称と肩書としての普通名詞の違いについて、以下のようにまとめることができる。

表2 敬称と肩書としての普通名詞の比較

	敬称	普通名詞（肩書）
自律性	×	○
敬意の標示	○	○
待遇度の調整	○	×
直示性の調整	○	×
世界知識の関与	×	○

最後に、対称詞に敬称が付く場合であるが、(2c)のように、その数はごく少なく、使用頻度も乏しい方で、使用においても性別・年齢・地域差が考えられる。そして、対称詞の単独の形が無標の形であるため、敬称を付加することによって相手への敬意を示すことになると考えられる。なお、対称表現に付く付属語として、「なんか・ごとき」などもある。「さん・さま」のような敬称が相手への敬意を示すプラスの待遇としての使用であるのに対して、これらは相手への敬意を下げるマイナス待遇（例えば、インポライトネス）を強化するための使用であると考えられる。

以上、対称表現に敬称が付く場合を見てきたが、本研究での対称表現において、敬称がどのように位置づけられているのかについて考えてみると、表2のように、対称表現に付属されて、聞き手への敬意を示す一方、「ちゃん・くん・さん・さま」のようなバリエーションからの選択ができるため、待遇度を調整すると言える。さらに、普通名詞を対称表現化（代名詞代用語）できる点から、直示性を付与（または強化）する役割を担うと考えられる。

<sup>6</sup> ただし、「教師」のように、「さん」を付けても代名詞代用語として使えないものもある。野元（2019）では、これについて、類義語の「先生」の存在による阻止効果の可能性もあると述べている。

## 5. おわりに

本研究では、日本語の発話の中の聞き手を指す表現を「対称表現」とし、その中の固有名詞、普通名詞、対称詞を中心に、各表現が聞き手のことを指すという解釈にたどり着くまでのプロセスを考える際、文脈の活性化の段階から考察を行った。さらに、対称表現に付く敬称の機能についても検討し、同じく敬称としての意味用法を持つ普通名詞（肩書）との違いを整理した。

残された課題として、普通名詞の聞き手指示における、知識文脈の必要有無について少し述べたいと思う。本研究では、聞き手の特定に知識文脈が必要となる普通名詞について、聞き手の具体的な役割を示す表現であり、その中には敬称として機能するものが含まれると述べたが、敬称として機能するという面から見ると、「お父さん・おまわりさん」のように当てはまらないものも考えられるため、その違いについてより詳しく分析する必要がある。また、「具体的な役割」という部分においてもより論理的な説明が求められる。今後は、実際の使用や用例などを参考に、これらの点について考察を深め、対称表現と文脈、また敬称との関係をより明らかにしたい。

(と ひよな・言語文学専攻)

## 参考文献

- 加藤重広 (2006) 『日本語文法入門ハンドブック』 研究社  
——— (2017) 「文脈の科学としての語用論 — 演繹的文脈と線条性 —」 『語用論研究』 18, pp. 78-101
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』 岩波書店
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』 研究社
- 田窪行則 (1997) 「日本語の人称表現」 田窪行則 (編) 『視点と言語行動』 くろしお出版, pp. 13-44
- 野元裕樹 (2019) 「代名詞代用語の意味論」 『日本言語学会 159 回大会予稿集』 pp. 486-492
- McCready, Elin (2019) *The Semantics and Pragmatics of Honorification: Register and Social Meaning*. Oxford: Oxford University Press.